

ダヴィッド・ロックウッド「黒服の労働者」

AKITA, Joju / 秋田, 成就

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

146

(終了ページ / End Page)

160

(発行年 / Year)

1958-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008977>

紹介

「黒服の労働者」

ダヴィッド・
ロックウッド

秋 田 成 就

一 ロンドン大学の David Lockwood によって最近「The Black-coated Worker」と題する書物が刊行された。「黒服の労働者」とはわれわれの聞きなれない言葉であるが、イギリスでは、普通、われわれがサラリーマンあるいはホワイト・カラーという場合にこの名称を使っているようである。正確に言えば肉体労働者でない労働者ということであろう。用語はともかくとして、本書で著者の提起しようとする問題は、その副題：A Study in Class Consciousness が示すように、かれらの階級意識の実証的な分析である。わが国でも最近、ホワイト・カラーの意識の問題が次第に関心を高めるようになり、幾つかの研究や調査の成果として現われている。^{註一}労働者の意識の問題は、ほんらい社会学ないし社会心理学の領域で、イギリスよりむしろアメリカで発達しているように見受けられる。筆者のインフオーメーションの少いせいも

あるが、イギリスでこの種労働者の問題を正面からとりあげた研究は、一九三五年刊行の F. D. Klingender の「The Condition of Clerical Labour in Britain」以来あまりきかない。このような「関心の空白」の主たる理由は、イギリスではやはり、労働運動の主流を占めるものが質的にも量的にも肉体労働者のそれであり、それ以外のものは無視されてきたという事実を求めることができよう。ちなみに、イギリスでも「階級」という問題自体に関心がないというのではない。階級間の mobility ^{註二}などについて並々ならぬ関心が払われている。しかしそれが階級意識の問題として登場してこないところに意味がある。

右のような意味で、本書といわず、一般に本書の提起するような問題が、世の関心を集め出したという事実は、わが国における情況とも関連して、われわれの目を、その背後にある社会的事情

に向けさせずにはおかない。もちろん、このような課題は原著者の直接関心をもつ対象ではないし、筆者の推察にすぎないが、最近のイギリスの労働運動が行きつくところまで進んで、ようやく行詰りを見せ、組合運動の内部でもそれが意識されつつあるという事実は多くの識者の一致した観方である。即ち、肉体労働者を主体とする組合運動が固定化して進むべき方向を見失つてゐる一方、より社会主義的な意識に支えられる労働党が、時として組合運動とのバランスを失いがちであるという二つの事実は、従来労働運動の側流として、あるいは足手まといとして放置されてきたホワイト・カラーの労働者に何程かの期待をかけさせるといふ結果を生んだのではないであろうか。著者が本問題提起の契機としてとりあげるいわゆる「誤れる階級意識 (false class consciousness)」というテーマ自体がこのような意味をもつと考えられるのである。

問題提起の動機はともかく、著者が本書で分析を試みた諸問題は、その方法と結論のいずれの点においても重要な問題点を含んでいると思われるので内容を簡単に紹介する次第であるが、さきへのべたように、わが国でも若干のすぐれた調査研究があるし、彼此の社会的背景の差異を考えて、できるだけわれわれの関心に近い角度からとりあげたいと思う。

註一、最近の調査としては、例えば東大新聞研究所編「都市勤労市民層の政治意識とコミュニケーション行動」東大新聞研紀

要七、その要約、高橋徹「ホワイトカラーの政治意識」(月刊労働問題八号)。本書でいう「黒服労働者」は、右調査で採用している日本社会学調査委員会の階級的地位の分類によれば「新中間層」に該当すると思われる。

二、social mobility の研究として、D. V. Glass ed. *Social mobility in Britain, 1954*; Geoffrey Thomas, *Labour mobility in Gr. Britain 1954-49*、など
三、例えばイギリス組合運動にうけてミシガン論述 *Wigham, Trades Union, 1958, p.238*、参照

二 著者は blackcoated worker の典型を事務員 (Clerk) に求める。これは事務労働者がイギリスで過去百年間に十倍以上に増加し、その全労働力に占める比率は一八五一年の1%から、一九五一年の10%に上昇したという点から見て首肯しうるところである。ホワイト・カラーやサラリーマンの大部分が事務労働者で占められているという点はこの国にも共通した事実であろう。

しかし同じ事務労働者といつても、その業態やこれをめぐる環境は長い間に大きな変化を遂げている。この歴史的な変化と、それにもかゝらず残されている事務労働の本質的性格との相関点において階級意識の問題を究明しようという方法論こそ、著者が本研究で意図した最も特異な点というべきであろう。今日の実態調査の多くが、現在の時点を中心として構成されているのに対して、著者は同一の事象を互に相距つた時期について対照させるため、前世期の Counting House (帳場) 時代の事務労働者の実態

をできる限り究明し、この時代におけるかれらの階級意識の背景を浮き掘りにしようと努力している。しかしこの部分 (p. 19-23) は著者の野心的な意図にもかゝらず、資料上の点から見ても余り成功をおさめたとはいえない (引用資料の多くが二次資料である)。けれども、counting house (帳場) の世界は一般的に事務労働者をして、その客観的な経済的地位にもかゝらず、他の労働階層から自己を疎外し、逆に企業者および知的専門職の階層に帰層意識を感じさせる環境を形成していたという著者の結論は恐らく何人にも異存あるまい。

こゝで著者の問題提起と方法論の基礎にあるセオリーをとり上げてみよう。著者は階級意識はその基底にある経済的ファクターによって規定されるというマルクス流のオーソドックスな考え方を否定はしないがこれに満足しない。しかし著者は本書では、階級意識の理念に関する論争に深く立ち入らないで、もっぱら「黒服労働者」の階級意識を規定するファクターの追究に焦点を合わせる。この態度は必ずしも「意識論」からのイデオロギー的回避と非難するにはあたらなひであろう。何となれば、筆者はこの場合、「誤れる階級意識」——もしこの非難が当たっているとすれば——ということの問題にしているのであって、その前提には肉体的労働者の「誤りなき階級意識」ということが考えられているからである。

筆者によれば、「黒服労働者」の階級意識は労働階級に対する

帰属意識と疎外意識の複雑な交錯から成る。そしてそれは、「黒服労働者」の今日の経済的地位が、実質的には労働階級のそれと差異がないにもかゝらずそうだとするところに問題がある。より具体的の問題を展開すれば次のようである。

「黒服の労働者」は自分たち労働者と同じく無所有のプロレタリアートであり、自己の労働力を資本家に販売する外に生計の資を得ることのできない階層である。従って労働運動について自分たちと統一した行動をとることを期待している。にもかゝらず、その行動はいつも期待外れである。かれらは「紳士気取」と「自己満足」に汚され、しよせんわれわれとは別世界(スノビネス)の人間なのだ、といった非難が肉体的労働者の側からしばしばなされている。この非難は黒服の労働者が現実におかれている地位から当然、推論ないし期待される階級意識から外れた「誤れる」意識をもっていることに向けられるものである。著者によれば、この非難は必ずしも不当ではないが、それが「所有と無所有」という余りにも広汎な観点からだけ階級地位を設定しているため、結局、その非難は単に、同一の経済的条件にある者も、その階級性について別の考え方をすることがあるという事実を裏証するだけに終っている。問題は何故にそのような開きができるかを説明することであり、それを規定するファクターを発見することであると。

著者が右の意味における主要なファクターとして挙げるものは market situation, work situation, 及び status situation ③③

つてある。market situation とは被用者の所得、雇用安定度、昇進・配置転換の機会など、いわば狭義の雇用条件を指し、work situation とは被用者の就労過程（生産・管理・分配における）においても人的関係（status situation）とは被用者の一般社会における地位ないし身分をいう（内容は分るがわれわれにとっては聞き馴れない用語なので以下原語のまま用いる）。

このようなファクターの設定の当否を問題にする前に著者の究明した内容を少し見てみよう。

第一 market situation の問題 黒服労働者はなるほど、その生計の資を労働力の販売に求める外ない無産階級であり、労働条件についての個人としての交渉力の弱さ、失業の不安という点で基本的には労働階級と同一の地位に立っている。しかしこのカテゴリーに入る者のすべてが必ずしも同一の market situation をもつものではない。いま階級帰属意識の差異がイデオロギー上の混迷や自己満足ではなく、このような situation の現実の差異にもとづくものとすれば、この差異の究明は階級意識の研究にとって出発点となる。著者はかくして、両階級の market situation における差異を以下の点に求める。

(一) 事務労働者の所得が、労働階級に比べて相対的に高いという点。このシエールは別表に示すように、肉体労働者の賃金の上昇率の速さによって前世紀の「帳場時代」に比べれば遙かに小さくなっているが、多くの場合なお大きい。それは前世紀

1905～6 年から 1955 年までの事務員の俸給と肉体労働者の所得比較表
（括弧内は 1905～6 年を基準とした増加率〔%〕）

職 業	1905～6	1925	1935	1955
事務員（男子 28才）	£	£	£	£
銀行事務員	170	275 (62)	263 (53)	620 (265)
公務員事務職員	100	272 (172)	240 (140)	483 (383)
地方自治体事務職員 （一般職）	90	200 (122)	200 (122)	475 (428)
鉄道事務員	80	180 (125)	—	450 (463)
肉体労働者	S	S	S	S
男子・少年	27.0	57.6 (114)	56.9 (111)	—
男子（21才以上）	28.8	—	—	223 (674)
平均労働時間（肉体労働者）	54.4			45.9

に事務労働者のもつていた稀少価値によつて生じた格差が伝統化して、かれらの俸給がその労働力に対してというよりむしろ、status に対する報酬とみなされ、雇主はかれらのオフィス・スタッフとしての忠勤を確保しておくために、人件費の極小部分にしかならないかれらの俸給を賃金算定の場合と違った原則をもつて優遇してきた。そこに特権的地位からくる特別の意識が生ずるのもむしろ当然であろう。

(二) 事務労働者が一般に伝統的に高い job-security をもつてゐることである。労働階級が宿命的に負うてゐるレーバー・マーケットの喪失の危険が相対的に少いということは、かれらに経営者のもつ「所有」(ownership) に代る何ものかを与えてゐる。それはかれらの意識形成にとつて、第一の条件よりもっと大きな影響をもつとさえ思われる。

(三) 事務労働者、とくに男子の場合は、経営者側のポストに昇進する機会に恵まれていること、

(四) 事務労働者は退職年金の恩恵にあづかるほか、頭脳労働という特性にもとづく仕事の清潔さ、快適さ、テンポ、労働時間、休暇といった非金銭的なアドバンテージをもつてゐる。

これらの差異はかつての「帳場時代」には著しい特徴であつたが、今日の「事務所」時代には著しく縮小された。にもかゝらわず、このような差異が今日なほ事務労働者に「上級の被用者」としての意識をもたせている点には変わりがない。

第二 work situation の問題 近代産業社会において個人心理

を形成する最も重要な社会関係 (social relation) は生産・管理・分配の組織を通して発生する。分業の発展により、すべての被用者は好むと好まざるとにかゝらず他の被用者、職制または消費者と社会的関係をもつ。ところで労働者は工場の組織機構の中で、その技術上および経済上の要請である非人間的合理性 (rationality) を通じて経営および労働者の双方から physically に隔絶される。機械生産の計算性 (calculability) と規律性は生産の場における雰囲気をつねに非人間的な対立 (antagonism) に導く。そしてこの関係は労働を商品として扱う labour market の作用を通じて工場外においても再生産される。この過程は当然のことながら、反面で労働者同志を physically に統合させ、かれらを社会的に帰属化させる。つまり近代企業における技術の発展はますます労働と技能の平準化を促進するから、一方で工場のメカニックスの惹起するビュロークラシイの非人間性に反発し、他方で、一の工場の労働者の労働条件の向上は他の工場の労働者との連帯によつてのみ期待することができるという階級帰属意識を生み、それが団体行動の基礎となるのである。要するに労働者の場合、その work situation は階級対立(峻別)と階級斗争感として割り

きることができるが、「黒服労働者」の場合はどうであらうか。古い「帳場時代」の家父長的環境と労務管理とは、かれらの帰属意識の発展を阻止した。事務労働者の職場は小さな店に分散さ

れ、多くの場合、工場労働者と隔絶し、かえって雇主と個人的接触が強い。そのうえ、さきにも述べた *market situation* としてかれらの作業および報酬の基準に統一性がなく、個人的な昇進の機会等を併せ考えれば、かれらが肉体労働者に帰属意識をもたなかつたとしても不思議ではない。

近代的な「事務所時代」に入ると、ビュロークラティックな管理方式がとり入れられ、職階秩序が確立されて、かれらの *mobility* は上にも横にも閉ざされる。そうなる生産工場におけると同じような非人間的合理性と規格性が家父長的人間性にと替ることになる。しかしそうなくても、かれらがその労働と地位の特性から、なお管理者側への相対的、近きを意識するかぎり、それは肉体労働者への帰属意識とならないで、逆に相互の距離感を高め、互に敵対する状態を作り出す。近代の「オフィス」における合理化された管理機構が、なお古い「帳場時代」の個人的特殊関係を払拭しきれない原因として著者は四つを挙げている。

(一)「黒服労働者」の管理の単位は生産工場の筋肉労働者の場合に比してなお小さいこと、

(二)「オフィス」の内部における労働の分化が部門別、職階別、地位別というように更に細分化されたこと、

(三)事務労働者の場合、技能の平準化の基準が求めにくいこと、要するに事務労働そのものの性格あるいは運営単位の規模からみて、その合理化の程度は工場労働の場合に比して相対的に低い

から、それは帰属感を促進するに大きな役割をもたないというわけである。かくして「黒服労働者」の *status situation* の構造の基礎は労使間の利益が相反するかどうか、および被用者間の利益の共通性を意識するかどうかについての考え方如何にかまつてゐる。そこで著者は「黒服労働者」の *work situation* は、肉体労働者と基本的には同一の社会的地位にある今日でも異なるといふ婦結から、個人の自己疎外感が集合的連帯感に発展するのは決して狭義の無所有という階級的地位の自然的結果ではないという結論に達したのである。

第三 *status situation* の問題 *status* とは、ある人が他の人の行動や地位に対する評価の区分を示すものであるからほんらい、階級とは別の現象であるが、人の現実の生活においては、階級差と身分差が深い連関をもっているという観点から、著者は *social status* (社会的地位) がどのように階級意識に結びつくかという問題を、前述二つの条件以上に重要視する。ところで、近代経済社会においては、身分差の基礎になる価値づけは企業家や専門職の中流階級に高く与えられているという事実は著者の指摘をまつまでもなく明らかである。このような評価の基準としては、その仕事が高い教育程度を要求し、かつそれがそれに応じた高い報酬を支払われ重い責任を負わされているということの他に、仕事が清潔で非肉体労働だという事実が挙げられ、このような「尊厳すべきもの」がその人の社会的地位を決定させている。このよ

うな身分差の意識、つまり身分意識は一体、階級意識とどうい
う関係をもつかよこまでの問題である。

その労働の種類によって社会的な身分差がつけられるという事
実は、労働階級の場合には、かえって階級意識を却揚させるとい
う結果を産むのに対して、「黒服労働者」の場合には、専門職の中
流階級の身分に近づこうとする欲望が強いために逆に階級意識の
昂揚を阻んでいる。それは現象としては、教育の尊重とか家族人
口の制限とか或は将来ないし次代に備えての「威厳」の強調とな
って現われる。work situation の差異がこの事実に関係が深い
ことはいうまでもない。階級的自覚という集団的エトスに中流階
級の文化を志向する個人的行動がとって代るこのような現象はし
ばしば、労働階級の「ブルジョア化」として非難されるけれども、
たとえどのようなレッテルが張られようと、かれらの間にそのよ
うな身分意識が強固に存在することは否定できない。しかしなが
ら、このような身分意識を過度に重視することは著書も階級意識
の正当な把握ではないとしてこれを戒しめている。今日では、中
流階級と労働階級の階層差ということ自体が薄弱になっており、
むしろ両者は同質化の傾向にさえある。これにつれて「黒服労働
者」の身分意識も変化してきており、その変化も一様ではないが、
一般的には二つの方向をとって一方はなお、より上層の階級を志
向し、他方は反対に下層つまり労働階級のそれへ帰属していく傾
きがある。しかし階級意識全般の問題として見るときは、「黒服

労働者」にたとえ、労働階級の身分意識に帰属しようとする流れ
があっても、一方でこれに逆行する身分意識の存するかぎり、両
者の身分上の対立感根強く残って、全体としての階級連帯感を
弱める結果となっているといえる。

著者が階級意識を決定するファクターとして設定した三点は概
略、以上のようなものである。しかしながら、階級意識の問題を
考えるについて見逃してはならないもう一つの問題を著者は指摘
することを忘れていない。それは「黒服の労働者」の組合運動の
性格である。著者はこの問題をかなり詳細に論じている。(ibid
pp.135~198) 要約すれば以下のようである。

現在、かれらの組織化はかなり進んでいる。事務労働者に例を
とれば、一九五一年現在でその代表的五組合の組合員数は総計四
五万に達し、四人の事務労働者中一人は組合員という割合になっ
ている。もちろんこれらの組合は何れも最近五〇年間に急速に発
展を見たものである。

しかし、と著者はいう、組合の組織化あるいは団体行動は必ず
しも、それがそのまゝ階級意識の表現であるとは限らない。階級
意識とはある被用者のグループが他のグループの被用者と共通の
利害関係に立つことを自覚するときにはじめて現われるものであ
る。「黒服労働者」の場合もその例外ではない。かれらが、自ら
の利益と肉体労働者の利害とが基本的に同一であることを自覚し
たときはじめて階級意識の連帯があるのである。では、そのよう

な連帯を組織運動の中に発見する方法如何。

著者はこの点について、間接的な方法だと断わりながら、次のような指標を設定して分析を進めている。(1)ある組合が発展の途上で名称や目的をどう変えたか (例えば友愛組合から労働組合への転換)、(2)目的達成のためどういう手段をとっているか(例えばストに訴えるかどうか)、(3)上部または横の組合組織との関係(例えばT・U・Cに加盟しているか、或は肉体労働者の優勢な組織に参加しているか)、(4)政治運動への帰属関係(例えば労働党への加盟)、(5)ゼネストなど、階級的機危に際して同情的行為に出たかどうか(例えば一九二六年のゼネスト当時の行動)、(6)指導者または組合員の社会的政治的傾向、意識はどうか(例えば議会主義を肯定するかどうか)

著者はこのような問題の分析に当って、具体的に事務労働者の代表組織をとり上げその性格を種々の角度および資料から究明している。同じ事務労働者の組合といっても、各々発展の時期も速度も背景も一様でなく、いずれの組織もそれぞれ複雑な内部事情をもっているのだから、「黒服労働者」の組合運動の性格を知ろうと思えば、どうしてもこのような実証的な方法に頼らざるを得ないし、そういう方法をとらないで、単に外面的事象からア prioriに運動の性格づけを行うというやり方は真相に近づくものではないと考えるが、イギリスの組合の内部事情に全く暗いわれわれ読者は正直のところ、著者の説明について行くだけで、その当

否の判断はできない。しかし著者のこのようなやり方は、とかくこのプロセスを省略してゼネラリーゼーションを急ぎがちのわれわれによい反省を与えてくれるというものである。

ともかく著者がこの実態の究明を経て達した結論は、事務労働者の団結行動は労働組合の線で結成されているということである。その運動の目標、方向つまり基本的な性格は、労働階級のそれと同一の労働運動という関点に立ち、その意味で階級意識に溢れている。実際、これらの代表組織のいずれもが、組合員の経済的地位の向上を第一義的目的とし、紛争の解決のために団体交渉と調停機構を用意し、それをストライキの武器でバック・アップし、他面、政治行動を通してその地位の確保、上昇をはかり、T・U・Cに加盟(N・A・L・G・Oを除く)して肉体労働者と同一行動をとっているという事実だけからも、かれらが労働階級と違った身分意識をその運動の中に反映させているとは到底考えられない。そこで著者はさきの階級意識の三つのファクターと関連してこう断定する。もし「黒服労働者」との組合運動と肉体労働者のそれとの間に何らかの差異がありとするならば、それは第三のファクターである「身分(status situation)によるものではなく、work または market situation の差異によるものである」ところで、著者はかれらの組合運動の性格の分析に当って、かれらが非肉体労働者の組合としての特権の利益にかなり深い関心を持ち、肉体労働者の優勢な組織への解消については余り乗気

でないという事実を決して見落さない。もし、著者がいうように、ある組合と同一の利害関係に立つという自覚が階級意識の前提だとすれば、その成否の鍵は何といつても特殊利益が一般(階級)利益に解消されるかどうかということであろう。とすれば、「黒服労働者」の組合運動の性格が、組合運動の一般の目標、機構あるいは行動のし方(著者に従えば instrumental benefit)または組合運動や社会、政治運動に対する理念(著者の ideological benefit)については、肉体労働者と深い共通性を意識しても、その直接的な利益(労働条件や昇進、年金等)の点で特殊利益に拘泥するかがり、そこに同一利益の連帯がくづれる契機が存在する。この点で著者が、同じ「黒服の労働者」でも、その経済的地位の差異によって組合運動の性格に大きな距たりを生ずる例として、銀行事務員と鉄道従業事務員とを対照させているのはきわめて興味深い。前者は「黒服労働者」中のアリストクラシー性を、後者はプロレタリアー性を典型的に表現していることはいまでもない。いずれにしても、「黒服労働者」の組合運動はかれらの今日の経済的地位の自覚の上に立ち、肉体労働者との中流利益の連帯を意識しながらも、最後の直接利益という点で後者から背離してゐる。そしてこの背離は「黒服労働者」のもつ伝統的な market および work situation に規定されている。そしてそれがかれらの現実の class situation に外ならないというのが著者の最終的結論である。

註一、著者は一八七一年労働組合法(イギリスではじめて団結権が確立した)以来、第二次大戦までの期間における「黒服労働者」の組合運動へのリアクションはお世辞にも熱心とはいえなかったとして、それが肉体労働者のかれらに対する不信の念を惹起したとしている。ホワイト・カラー・プロレタリアーと云う言葉は肉体労働者の生活水準にあやかむことに吸着してゐる「黒服労働者」のあわれむべき自己購着を強調するために、とくに大戦中期に作られたものだという。組合運動の左翼の線からのかれらに対する批判は現在も痛烈である。

二、両者の賃金・所得の差異をより詳細に研究するのは、A.L. Bowley, *Wages and Incomes in the U.K. since 1860*; K. G.J.C. Knowles and D.J. Robertson, *Differences between the Wages of Skilled and Unskilled Workers, 1880-1950* (Bulletin of the Oxford Institute of Statistics 1951) を参照。

三、E. Hobsbawm, *Labour Aristocracy in 19th Century, 1954* はその歴史的過程を研究した好著。

四、近代企業の *bureaucracy* と云ふのは A. W. Gouldner, *Patterns of Industrial Bureaucracy* 参照。

五、身分差が階級意識を昂揚させる好例として、著者は大陸諸国とくにドイツにおいて、肉体労働者と非肉体労働者の厳格な身分的差別(それだけの事実で前者は社会的に中流階級から排除された)が強い階級意識を醸成した事実を挙げ、逆にアメリカではこのような身分差が社会的に余り強調されないために肉体労働者の階級意識が緩和されている点を指摘している。直ちにそうとはいえないが、興味のある観点である。

六、組織率の高い階層あるいは組合が必ずしも高い階級意識をもつと限らない点はわが国の場合を考えるとよりはつきりしている。東大新聞研の前掲調査によれば、階級意識を形成する主要なフアクターとしての政治意識において、肉体労働者よりむしろホワイト・カラーの方が高いという結果さえ出てゐる（前掲資料および高橋論文参照）。

七、これらの代表組織とは「輸送関係係給職組合（T・S・S・A）」、「全国事務・管理職労働組合（N・U・C・A・W）」、「公務事務職員組合（C・S・C・A）」、「全国銀行被用者組合（N・U・B・E）」および「全国地方自治体職員組合（N・L・G・O・A）」の五組合である。

三 以上に述べたような問題設定と分析とを通じて、著者は——結論という言葉に多くの限定を与えながら——次のように結ぶ。

「誤れる階級意識」というテーゼの当否はもっぱら「階級」という言葉の定義如何にかまつている。そういう意味で本調査から得られたデータはどちらにも使えることにならう。もし階級を、生産手段を所有しているか否かという条件のみによつて区分するならば、「黒服労働者」は無産階級という階級の地位にもかゝわらずこれを自覚しない「誤れる意識」をもっていることは明らかである。しかしそういうことは、単に、ある評価の下にかれらを非難するだけのことで、かれらの階級意識がいかに誤っているかという階級意識そのものゝ説明にはなりえない。これに反して、もし階級という理念を所有関係以外の客観的条件を加えて考えたとすれば、かれらの階級意識は正にその経済的地位を如実に反映して

いることが実証された。もつとも階級をこのように定義づけることは、階級の地位の基準としての「所有」の重要性をいさゝかも否定するものではない。階級という概念は、それによつて社会的事実を理解するための便宜であり、階級の定義は、特定の具体的事象の説明に役立つかぎりにおいて正当化されるのである。と。

四 以上本書において著者が云おうとしているところをとりまとめて紹介した。わが国における問題と関連させて以下に少し卑見をのべることにする。

イギリスにおいて最近このような問題が提起された背景については、さきに推測を加えたところであるが、それはとも角、著者の提起した問題は歴史的な過程を経て現代の資本主義経済社会の中で刻々に変動する階級意識をとり上げているという点で、単なる一社会事象の心理学的研究にとどまるものではなく、労働運動の今日的課題につながる社会科学上の問題である。

しかし著者が最後に達した結論は、われわれがホワイト・カラーの意識の問題としてとり上げる意味とかなり開きがあるようである。著者は、「階級」という概念をそれ自体内容をもつ目的的概念と考へないで、特定事象を説明するための手段と考へる。たしかに、「階級」という言葉は今日なお、社会構造論上の明確な位置づけが行われているとはいえないし、社会の内部におけるその上下または区分の基準も曖昧かつ相対的なものである。しかしだからといって著者流に階級を全く抽象的なターミノーロジーの

問題にしてしまうことは問題であらう。はじめに相対的な基準によって出来上った社会事象がその後の商品生産社会のメカニズムによって次第に固定化し、今日では動かし難い事実となつてゐるところに「階級」の意味があるのではないか。でなければ、「誤れる階級意識」のみならず階級意識とらうこと次第問題にする意味がないことにならう。かくては著者の situation や status という問題も大した意味がなくなるであらう。

そこで著者が真に問題にしやうとするところは、階級とくに、労働階級と他の階級を「所有と無所有」という基準だけから區別して、その意味で後者の階級に属すべき階層が、後者の階層のもつ意識と違つた意識をもつてゐることを「誤れる階級意識」と規定し、非難するといふ一般の傾向に対して、そのような考え方が真の「階級意識」の究明にとって役立つものではないことを指摘する点にあると思われる。もしそうだとすれば、それは概念や定義の問題ではなく方法論の問題であつて、その意味ではとくく調査対象に関する図式的、観念的定義にもとづいてアプローチをしがちなわれわれに警告するところまことに大きいといわねばならぬ。

「所有と無所有」が階級の地位を規定する基本的要因である点については著者も否定するものではないし、また「階級」と「階級意識」とは同じことを意味しない^{註二}といふ著者の主張をわれわれが一応肯定すれば、著者が「階級意識」を規定するファクター

として経済的および社会的諸関係を究明しようという態度はそのし方に問題はあつても決して一概に否定することはできない。market, work および status situation という図式はどのような社会構成論上のセオリーを前提にしているのか審らかにしえないが、始めの二つはいわゆる広義の経済的条件に当り狭義の労働条件と経営内の広義の雇用条件を意味すると考えてもよいであらう。status という概念は stratification theory 上しばしば使用される用語で社会意識といわれるものゝ一つといえるであらう。

このアプローチから著者の得た結論は、そもそも「黒服労働者」は前世紀の「帳場時代」以来、これらの諸条件において肉体労働者と大きな距たりがあつたが、その条件は次第に消滅してきたとはいへまだ完全に清算されるにいたつていない。しかし注目すべきことはこのプロセスは必ずしも「誤れる意識」の消滅や清算の一方的方向にあるのではなく、経済的条件の差異が特権的な社会意識の強化に逆作用しているという事実である。しかしこの点では例外がある。即ち「黒服労働者」の組合運動の性格は、今日では、もはや社会的地位や身分について肉体労働者との間に何らの意識の差異もないといふことである(もつともそこでも経済的特殊利益の差は両者が全く同一歩調をとることを阻げてはいるが)。これは恐らく客観的にも正当な結論であらう。しかしそこにも問題がないわけではない。組合運動という集団的行為も個々のメンバーの意思の集積である。個々の組合員が肉体労働者の意識との

間にかなり大きな距たりをもちながら、組合運動にはそれが顕在化してこないという二つの事象の相関々係は一体どうなるのであるか。この点の究明は本書に欠けているが、「官公労働者」という「黒服労働者」の大群を労働戦線の大きな柱としている日本の実情を考える時、是非とも知りたいところである。

次に著者はこの三つのファクターを通じて、「黒服労働者」が一般により上級の被用者として、むしろ経営側への帰属意識をもち、労働階級への帰属意識の強い階層（たとえば鉄道従業員など）と対照させている。しかし、アメリカなどの社会学の通説^{註四}によれば、中間層に属する者が、以上のどちらの方向への帰属意識も積極的にもつことなく、むしろ労働運動や政治運動その他に対する「無関心」層を形成しつゝあるといわれる。このことは労働階級自身についてもある程度認められるところであり、また今日のマス・メディアの作用を通じて促進されていることは否定し得ない事実である。著者はこのような角度から問題をとり上げていないが、経営内における意識は、いかに商品社会だとはいえず、直ちに社会意識につながるものではなく、生活の場における思考を通して形成されるのであるから、とくに「黒服労働者」の場合、重要なファクターと考えるべきであろう。

さて、本書を通じて、いろいろ問題点はありながら、ある程度イギリスの実情を知ることのできたわれわれは、著者がその周密な実態の究明を通じて下した結論を日本の場合について考察する

余裕をもちたいと思う。

第一に著者のいわゆる market situation がホワイト・カラーと肉体労働者でかなり差異があることはわが国でも一般的には変りがない。しかし^{註七}その具体的な現われ方はイギリスの場合とかなり違ふものがある。所得についてみれば、労働力の商品化が経営者の意識の中で徹底するほどに、両者の所得のシェーレは小さくなると思われるが、わが国の経営者の場合には逆にこのシェーレの拡大を利用して組合勢力の分裂を図ろうとする意欲がかなり強いことに注目しなければならない。従って今後シェーレの拡大といふこともありうる。これに反して job security の差はわが組の場合、ホワイト・カラーと肉体労働者でほとんど差異がないとみてよい。それは両階層を通じてわが国では「企業一家」の考えが強く、かつ経営者の解雇権が実質的に制限されていることによる。企業別に組合が結成されていることも大きな関係がある。経営内の昇進の機会がホワイト・カラーの場合圧倒的に多いことはわが国でも同じであろう。頭脳労働からくる仕事の清潔さという点を除けば、ホワイト・カラーが肉体労働者に比してとくにアドバンテージに恵まれているということはわが国ではそう例が多いとはいえない。（むしろ逆の場合もある）たゞし官公労働者が特権的地位をもっている点はわが国特有の現象といふべきであろう（例えば恩給という問題を考えよ）。わが国における market situation のうちもっとも重要なことは、完全雇用も最低賃金の保障もまた

体系的な社会保障制度も欠如しているという事実である。この点ではホワイト・カラーでも労働者でも少しも変りがない。むしろこの点で大きな差異が生ずるのは大企業の労働者と中小企業労働者の間である。そこで階級意識の差異はホワイト・カラーと肉体労働者間よりはむしろ大企業労働者と中小企業労働者の間によりきびしく現われるのが実情である。^{註八}このことはイギリスでは想像もできない現象であろう。

しかし第二に、わが国の労働者の階級意識の形成にとつてより大きなファクターは、著書のいわゆる *work situation* にはあるまいか。そしてこゝでもまたその発現の形態はイギリスの場合と様相を異にし、かつ積極的である。著者によれば、近代の経営体のメカニズムが要求する非人間的合理性が労働階級の集団としての連帯感を生むのであり、そしてその残滓が「黒服労働者」に残されているにすぎない。ところが、わが国の経営内では、経営側側から家長的企業一家意識が積極的に打ち出される。^{註九}肉体労働者の場合でも職階秩序の中に人的關係が反映し、労働の評価が技能差でなくて会社における勤続年限という忠勤度で測られ、かつその支えとして会社負担の大規模な福利施設が利用される。したがって、技能や技術を中心とした *labour market* が広く企業外に出来る可能性が薄く、その結果、労働市場における連帯感——職能別組合——のできる余地がない。もちろん企業内部で労働者が同一の条件と環境で働らくという狭い連帯感を生ずる余

地があるから、企業別組合は容易にでき上るが、経営側はいわゆる職勞分断政策によつて、ホワイト・カラーの職員層に一種の特権的身分意識を植えつけるための努力を惜しまない。^{註十}かくして、わが国の経営内の *work situation* はホワイト・カラーに特殊の意識を形成させるのにとりわけ大きな力をもっているといえる。

第三に *status situation* をわが国の実情についてみれば、もともとわが国におけるホワイト・カラーは官吏を別にすれば、一般にきわめてその出現の起源が浅く、かつイギリスにおけるような長 *counting house* 時代を経過していないし、また経済的條件において、最初からプロレタリア的地位に立っていたので、その中の特に上層部を除けば、社会生活において上流層への帰属意識をもつような *status* をもつ余裕がなかったと云つてよい。たとゝその教育程度の高さによつて辛じて社会的評価を得ていたにすぎない。従つて一般にわが国の大衆の貧困度からいって、このファクターが階級意識に作用するウェイトはイギリスの場合より遙かに低いと思われる。

さて最後に、わが国のホワイト・カラーの意識の究明について考慮すべき基本的な特質がある。それはホワイト・カラーの中でも量的、質的に大きなウェイトをもつ官公労働者の存在である。その起源はいうまでもなく官僚国家の「天皇の官吏」であり、その結果としてかれらがその経済的地位の低さにもかゝらず、ピラミッド型の階層秩序の末端にいたるまで特権的支配者意識に馴

らされてきたことは周知のところである。戦後の官僚機構民主化の積極的な努力にもかかわらず、この風潮をかなり根強く残したままその組合は日本の労働運動の中核として最先端の位置を占めてきた。ロックウツドがイギリスの組合運動の中に見出しえない個人にだけ知覚しえた階級意識の偏差が、やゝ違った形であるが日本の官公労組合の中に見出せるということは注目すべき現象である。

第二次大戦後、わが国では職員・労働者間の身分制撤廃運動が勃然と起り、同時にホワイト・カラー出の組合指導者が大量に労働戦線に進出した。ホワイト・カラーの歴史の上で特筆すべき現象といえよう。しかし戦後十年間でこの現象はかなり変化を来した。この間にわが国の労働人口の中かなりの部分を占めるホワイト・カラーの「階級意識」がどのように変ったかということは今日の大きな問題である。それは単に、ロックウツドのいうような「誤れる階級意識」如何の問題ではない。ホワイト・カラーはその一見、無力な存在にもかかわらず、サザランドが「ホワイト・カラーの犯罪」の中で明らかにしているような潜在的力をもっている。このような潜在的力が「正当な意識」に支えられないで、発動されることは社会にとつての危険信号を意味する。ロックウツドが排除するこの「正当」が、とくにわが国で問題にされなければならない所以は、正にわが国の社会体制が構造的にせいで弱だといふところにあることを忘れてはならない。

しかし正当か否かということを判別するには、まづ「階級意識」そのものの分析が必要であり、階級意識の分析にはロックウツドが本書で究明したようなフアクターの分析が是非とも必要である。調査の前に「戦術」があつてはならない。そういう意味で本書はイギリスの社会体制という背景なしには考えられない多くの前提に立ちつゝも、手堅い理論をもつて未開の領域へ斧えつを加えたその功績はまことに大きいといふべきであらう。

註一、日高六郎「階級」(社会学辞典・有斐閣)の項参照。

註二、この点 Max Weber の考えを受けつぐ見解として R. H. Tawney, *Equality*, 1952, pp. 50-1 参照。

三、無産階級の一般的乏窮化、保障の欠如というプロレタリアの趨勢にもかかわらず、資本制生産の発展に伴つて無産階級内に熟練度の差異が生じ、相互の間に利益の異質性が増大するという著者の見解は、わが国で一方でオートメ化していく技術水準の高い大企業と他面技術的にも低滞的な中小企業との差を考へるにつけ改めて考へねばならない問題である。

四、たとえば C. W. Mills, *White Collar*, 1951

五、イギリス労働組合における「無関心」の問題をとり扱つた J. Goldstein, *The Government of British Trade Unions*, 1952 参照。アメリカの学者がイギリスの組合を実態調査して

下して結論はイギリスで大きなセンセーションを起した。

六、政治意識とコミュニケーション行動との関係について興味ある調査データを前掲新聞研報告に見よ。

七、この点松成・田沼「日本のサラリーマン」(一九五七年)参照。

八、争議調査会編「中小企業の労働争議」(一九五八年)参照。

九、大河内一男編「戦後日本の労働組合」第三章参照。

十、わが国の企業で今日なお職員・工員の差別が厳格につけられていたところは意外に多い。のみならず戦後、一度この區別を廃止したところでも、経営側の反攻の過程で再び復活されたところもある。

十一、前掲新聞研の調査に明らかにされているようにホワイトカラー層の政治意識がかなり高いにもかかわらず、それが政治行動としてなかなか表現されないと、この事実は注目する必要がある。一般に意識の行動の潜在化という現象（調査にも現われてこない）はホワイトカラーの特徴の一つではあるまいか。

十二、イギリスの場合、肉体労働者側からの批判にもかかわらず「黒服労働者」が御用組合やスト破りあるいはファシスト

運動に積極的に参加した証拠はない（本書一九四頁）という事実は、かれらが簡単に足を踏み外さないだけの強固な社会体制に支えられているということに帰因している。イデオロギー的混乱に陥った日本のインテリ層が戦前反ファシズム体制への防波堤にならないばかりでなく、逆にそれに一役買ったという事実は、その背景にある社会体制の問題と関連していかなる場合にもわれわれの念頭から離してならない問題である。ファシズムの片棒かつぎとまではいかななくても、今日の日本のホワイト・カラー労働者がしばしば使用者側の働きかけによつて第二組合結成の中心となり結果的にスト破りの役割を果している事実こそは、かれらの意識と関連してその実態をもっと究明すべき必要を感じさせる。